

# 京都千年天文街道 8 年の歩み

## ～超新星出現の目撃者たち

Eight year History of "Millennium Trail of Astronomy in Kyoto  
～Witness to the supernova explosions

作花一志（京都情報大学院大学）

Kazushi Sakka（The Kyoto College of Graduate Studies for Informatics）

千年の都、京都は文化遺産の宝庫であり、天文学の分野においても、貴重な記録や史跡がたくさんあります。これら貴重な観光資源を有効に使うことを目指し、2011年春より洛内洛外の天文史跡を巡るまち歩きツアーを実施しています。歩行時間はどれも約2.5時間です。コースは開設当初より増えて現在では下表のようになっています。

コース	主な訪問地	主なトピクス
明月記	晴明神社 晴明宅跡 御苑	超新星 日食 晴明 定家
平安京	陰陽寮跡 神泉苑 大極殿跡	陰陽師の業務 曜日 小惑星
信長と天変	阿弥陀寺 相国寺 御苑	本能寺の変と暦 平安公家と彗星
暦合戦	梅林寺 円光寺 大將軍八神社	土御門の観測 貞享改暦
神楽岡	京大 真如堂 黒谷	京大天文の始まり 晴明の帰還
花山	花山天文台 元慶寺 清閑寺	太陽 花山帝出家

### 晴明神社



晴明神社の所在地は上京区晴明町 806 番地 1 と言っても京都では無効ですが、堀川今出川下がると言えばすぐにわかります。晴明を祀る神社で創建は 1007 年、そこは晴明宅の跡と言われているますが、これは不確かです。至る所に見られる☆印は五芒星（ごぼうせい）また晴明桔梗、晴明紋、セーマンなどとも言われます。陰陽五行説では、世界の構成要素は木、火、土、金、水の五つで、それらの循環によって色々な変化を説明しますが、晴明紋はこの原理を表現したものとされています。

京都の神社はほとんど拝殿が南向きですが、この神社では東向きで、御所（大内裏）の北東角、いわゆる鬼門に位置しています。ちなみに平安京の北境界は一条通りでここは洛外です[2]。境内には千本を越す桔梗が群生し夏から秋にかけて見事に咲き乱れます。

また多数の絵馬が奉納されています。SEIMEI を演じてオリンピック金メダルを取った羽生結弦選手をはじめスケーターの絵馬が目立ちます。

ここは明月記コースの出発点、天文街道の原点です。

清明神社の近くには「一方通行」で有名な一条戻橋があります。清明とともに藤原道長に仕えた源頼光や 500 年後には加藤清正、黒田如水、千利休もこの付近に住んでいました。

大鏡によると寛和二年（986 年）清明の邸宅は土御門通り（今の上長者町通り）に面していたこととなり、現在そこは京都ブライトンホテルの駐車場になります。それを示す石碑などは建っていませんがグーグルマップには記入してあります。花山帝が深夜、御所を抜け出し出家のために山科の元慶寺に向かう途中、清明の邸の前を通りました。その時清明は「帝おりさせ給ふと見ゆる天変ありつるが、すでになりにはけりと見ゆるかな。」という有名な言葉を吐くのです。花山帝退位事件の後、清明は昇進し加持祈祷のオファーも増え、大陰陽師となっていきます。晩年裕福になって現在の清明神社の地に別邸を持ったのかもしれませんが。



## 陰陽寮跡

二条城の北東、丸太町通と美福通交差点北東のマンション入口に、「平安京中務省東面築地所跡」の小さな金属板が埋め込まれています。ここが清明の勤務先で夜は天文観測をしたり、昼は天変の解読のため古記録を調べたりしていました。天文の部署は 20 人足らずでこのような業務をこなしていました。彼の天文業績としてはわが国最初の皆既日食（975 年 8 月 10 日）の記録、ハレー彗星出現の記録（989 年 8 月）が挙げられます。

## 真如堂

正式には真正極楽寺といい京都大学の東にあり、もみじの名所として有名です。

真如堂では、清明紋の入ったお札も配られていて、そのお札の由緒書には、次のような話が書かれています。

清明は蘆屋道満との術比べに負けて死んで地獄に落ちてしまいます。ところが不動明王が閻魔大王に掛け合ってくれたおかげでこの世に戻ることができたのです。閻魔大王、不動明王、清明が描かれた図は有名ですが 7 月 25 日だけ公開されています。



## 晴明塚

晴明の墓所（のひとつで）嵯峨嵐山駅の近くですが目立たない所です。左隣は長慶天皇陵で後はなんとか稲荷です。この一帯は角倉了以関連の史跡が多く晴明に関するものは他にありません。晴明は初め鴨川の中州にあった法城寺に葬られましたが川の氾濫で寺も墓も流されたそうです。その後、嵯峨の地に移り現在の地に収まったのは最近です。なお晴明の墓所は兵庫県佐用町、愛知県蟹江市など全国あちこちにあります。



## 藤原定家と明月記

定家と言えば百人一首よりも明月記を想い出し、明月記と言えば超新星を想い浮かべるのは筆者だけではないでしょう。今年、日本天文遺産に認定され、この天文学史研究会に出席の諸兄諸姉にはあらためて説明することもないと思います。3回の客星出現目撃記録者について 1006年の超新星は晴明の息子である安倍吉昌が観測記録していますが、安倍家の血統はもう一人の息子吉平が継いで行きます。この二人、どちらが長男か次男か？嫡子か庶子か？それは小説家漫画家にお任せします。この超新星は他の公家の日記にも書かれています。なにしろ史上最輝星でしたから。最も有名な1054年の超新星出現時の天文博士は晴明の孫である安倍時親のはずですが、この人何をしたのかさっぱりわかりません。1181年の超新星は8月5日の夜、東北の方向に現れました。当時の天文博士は安倍泰親で鳥羽上皇、後白河法皇、摂関家から信頼厚い陰陽師でしたが、この天変を目撃したという記録はありません。それより泰親にとって有名なのは鎌倉地蔵伝承で真如堂で解説しています。

3件の客星記事を並べてみるとSN1054だけ日付が、簡単すぎます。

体 増 変 光	見 南 方 或 云 騎 陣 将 軍 星 本	星 如 螢 惑 光 明 動 耀 連 夜 正	葵 酉 夜 以 降 騎 官 中 有 大 客	一 條 院 寛 弘 三 年 四 月 二 日	宇 天 関 大 歳 星 如	後 冷 泉 院、 天 喜 二 年 四 月 中 旬 以 降 丑 時 客 星 背 参 度、 見 東 方、	良 守 伝 舍 星	庚 午 戌 時 客 星 見 北 方 近 王	高 倉 院 治 承 五 年 六 月 廿 五 日
------------------	---	---	---	---	---------------------------------	---	-----------------------	---	--

SN1006（左）の出現日は寛弘三年四月二日癸酉とSN1181（右）については治承五年六月廿五日庚午と具体的に書いてありますが、SN1054（中央）では天喜二年 四月中旬だけです。しかも四月（ユリウス暦では5月10日～6月8日）には客星は太陽と同方向で見えなかったはず、またこの日に木星が見えるのは日没後で客星と同時に見えません。そこで四月中旬は五月下旬の間違いだろうと言われていています。となるとこの天変記事はもっと後になってから書か



れたのかもしれませんが。でも、もしも日本の陰陽師が中国の天文官よりも1ヶ月前に太陽の側に生まれただけの客星を見つけていたとしたら、エライことです！

『明月記』には3つの超新星を含む客星出現だけでなく、日月食、流星、彗星さらにオーロラの出現記録もあります。1198年2月8日の日食は九州では金環食、京都では部分食とはいえ9割も欠けたはずです。食の最大は7:11、高度はわずか4°だったので実際に見えたのは復円に向かう太陽の姿だったでしょう。

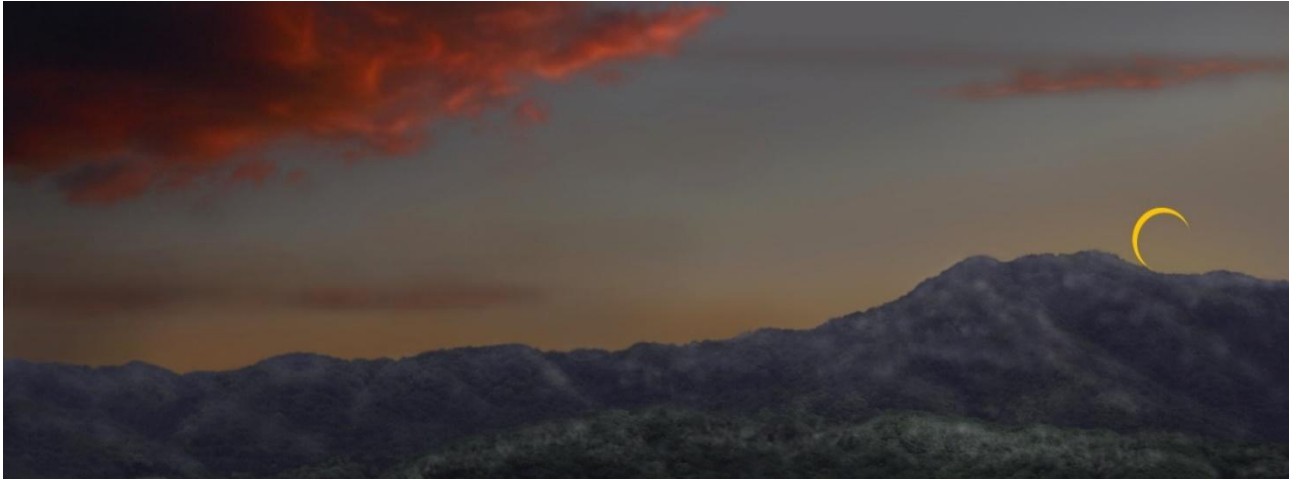


図7 1198年2月8日の日食（平尾圭郷氏提供）

オーロラ出現は定家自身が1204年2月21日の夜、「北并良方有赤氣、・・・如此白光、赤光相交、奇而尚可奇、可恐々々」と記しています。オーロラというとアラスカやフィンランドで見られるゆらゆら揺れる金色のカーテンを想像しがちですが、中低緯度地帯では低い空に山火事のような赤い光が見えるそうです。そのため赤氣と言われました。わが国で赤氣の出現と言え、本能寺の変の2ヶ月前（1582）や明和7年（1770）のものが有名です。彼は自然現象にも深い関心を寄せ、文理両道の達人だったと思われます[2],[3]。

## 定家の墓

定家に移り住んだ小倉山荘の場所についてはいくつか候補地があり特定されていません。また小倉百人一首を選定したと言われる時雨亭も嵯峨に3か所候補地があります。彼は歿後嵯峨に葬られたようですが、今は相国寺の中で足利義政、伊藤若冲と並んで眠っています。さらにこの隣には藤原頼長の碑があります。早熟の天才で兄忠通と出世競争の末、保元の乱（1156年）の首謀者にされ謀反人となってしまいました。実は彼は「台記」という日記をつけており、その中に1145年のハレー彗星出現記録があります。5月3日から6月18日まで毎日の非常に客観的な記録で5月中旬には朝も夕も見えたそうです。この年は天養から久安へ改元が行われています。「信長と天変」コースの最後の訪問地で、懐かしの「ウエスト彗星」や悲惨な最期の「アイソン彗星」の思い出話をしています。



十三町に住んでいたと言われていました。彼は  
で明月記を執筆した歌会を開いたのでしょ

なおこの石碑が立っている横には 300 年の歴史を持つという老舗の墨店があります。石碑  
よりも古そうです。

### 陰陽師その後

武士の世になって陰陽師は用なしになっていくのでしょうか？いやそうではなく、鎌倉幕  
府も蹴鞠、和歌、陰陽道など京の文化を導入し、鎌倉でも加持祈祷は盛んにおこなわれてい  
ます。さらに室町三代将軍足利義満の時代に安倍有世（1327-1405）は公卿に列せられ土御  
門と名乗ります。ただし天文観測の記録はありません。戦国の世では陰陽師は天文観測をし  
なくなったのか？それどころではなかったのでしょうか？ 戦国時代になると他の公家と同  
じく地方の有力大名のところへ疎開して、土御門家は若狭の名田庄（現；福井県おおい町）  
と京を往来していました。当時の天文博士は有脩（ありなが：1527-1577）、久脩（ひさなが：  
1560 - 1625）です。

永禄十一年（1568 年）上洛した信長は朝廷と不即不離の関係を経て天正十年（1582 年）  
武田へ出兵の前に公の京暦（平安時代から使われていた宣明暦）を三嶋暦（当時東国で使わ  
れていた）に変えるように天文博士である土御門久脩に伝えたそうです。三嶋暦のほうが正  
確というわけではなく、変更は閏月の置き方で、宣明暦では翌年一月の後に閏正月を置き、  
一方三嶋暦では年末に閏十二月を置くというだけのことです。ところが京の公家衆からする  
ととんでもない越権行為、もしそうなれば朝廷の正月行事は 1 ヶ月ずれるだけでなく、その  
次に来るのは朝廷人事への口出し、左大臣右大臣からついには天皇の即位退位にも信長が干  
渉してくるに違いない。もうじき全国を制圧する勢いの信長はしつこく三嶋暦の採用を迫り  
ます。正親町天皇、近衛前久をはじめ公家たちはオロオロ生返事。朝廷乗っ取りだ、もうや  
るしかない、そこで極秘のうちにできていた信長包囲策を動かして・・・なんて構想を描く  
のはやはり武家ではなく公家でしょうね。結果的に改暦は回避され、雲上人の思惑はうまく  
いきました。大役を果たした光秀をさっさと見限り、家柄のない秀吉に莫大な金銀で高位高  
官を買うのを推奨し、彼らはめでたく生き延びたのです。後は知らん顔というのは源平時代  
からの得意技です。

久脩は秀吉の世になっても生き延びますが秀吉の晩年、秀次事件（1595）に連座して多数  
の

陰陽師が尾張に追放されるという事件が起こります。ところが関が原の戦い（1600）の後、

定家の孫である冷泉為相（ためすけ）から始  
まる冷泉家は、歌道の宗匠家の内の一つで冷  
泉流歌道を伝承しています。冷泉家は、烏丸  
今出川東入ルにあり周りは同志社大学となっ  
ています。

京都市役所の西、寺町通を北上していくと  
「此附近 藤原定家京極邸址」の石標が立っ  
ています。気の毒にも工事金網に針金で支えら  
れていました。藤原定家はここ左京二条四坊

この邸  
うか。  
図 8 冷泉家 後藤正明氏提供)

ちやっかり都に復帰しているのです。家康から梅小路（水族館あたり）に広大な土地をもらい、さらに家康・秀忠・家光の徳川將軍宣下式を二条城で司るという大役をこなし、豊臣滅亡後には従三位まで昇進しています。どうみてもタダのお公家さんではないですね。戦国の世を逞しく生き抜いたしたたかな陰陽師であることは偉大なる先祖、晴明が藤原兼家・道長の厚い信任を得て安倍陰陽家を創設したのに倣ったのでしょうか！かくして陰陽寮制は明治

## 2

年の太政官制度廃止時まで続くのです。

久脩の見たはずの天変は日食、彗星、惑星集合などたくさんあり、特に武田氏が滅び本能寺の変が起こった1582年には多数の天変が起こっています。それは公家の日記やキリシタン宣

教師の手紙などに書いてあります。4月のオーロラは貴重な低緯度出現記録です。日食の起こった6月20日は和暦では天正十年六月一日、すなわち大事件の前日です。京都でも6割く

らい欠けた太陽が見られるはずでしたが、雨だったそうです。

また注目すべきは彼の生存中に2回も超新星爆発が起きていることです。ティコの超新星出現の1572年にはまだ12歳ですがケプラーの超新星出現の1604年には熟年に達し梅小路で安定した身分を保証されていました。観測の機会があったはずですが記録は見つかっていません。当時すでに日食は恐怖の対象ではなくなっていますが、彗星や客星はやはり不気味な天変で占いのネタにはなりえたはず、無関心だったとは思えません。まだどこかに彼の未公開の観測記録が眠っているのではないのでしょうか？

土御門家の菩提寺である梅小路の梅林寺には天文街道「暦合戦コース」で訪れます。また本能寺の変については「信長と天変コース」でお話します。

星々に親しみ、京都をより理解し、そして健康を保つためにも皆様のご参加をお待ちしています。[1][4]

### 参考文献

[1] <http://www.tenmon.org/>

[2] 作花『天文教育』Vol.25, No.1, p27, 2013 & No.2, p15, 2013

[3] 作花『明月記と最新宇宙像』p35, 2014 京都大学総合博物館

[4] 青木『天文教育』Vol.30, No.4, p.26, 2018

